

ヘブライ人への手紙に学ぶ

1996年1月から1998年10月

第18回 偉大な大祭司・神の子イエス④

あなたの心を神に献げなさい

第10章①節から⑱節 罪を贖う唯一のいけにえ(2)

- ① いったい、律法には、やがて来る良いことの影があるばかりで、そのものの実体はありません。従って、律法は年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人たちを完全な者にすることはできません。
- ② もしできたとするなら、礼拝する者たちは一度清められた者として、もはや罪の自覚がなくなるはずですから、いけにえを献げることは中止されたはずではありませんか。
- ③ ところが実際は、これらのいけにえによって年ごとに罪の記憶がよみがえって来るのです。
- ④ 雄牛や雄山羊の血は、罪を取り除くことができないからです。
- ⑤ それで、キリストは世に来られたときに、次のように言われたのです。
「あなたは、いけにえや献げ物を望まず、むしろ、わたしのために体を備えてくださいました。
- ⑥ あなたは、焼き尽くす献げ物や罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした。
- ⑦ そこで、わたしは言いました。
『御覧ください。わたしは来ました。聖書の巻物にわたしについて書いてあるとおり、神よ、御心を行うために。』」
- ⑧ ここで、まず、「あなたはいけにえ、献げ物、焼き尽くす献げ物、罪を贖うためのいけにえ、つまり律法に従って献げられるものを望みもせず、好まれもしなかった」と言われ、
- ⑨ 次に、「御覧ください。わたしは来ました。御心を行うために」と言われています。第二のものを立てるために、最初のを廃止されるのです。
- ⑩ この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの体が献げられたことにより、わたしたちは聖なる者とされたのです。
- ⑪ すべての祭司は、毎日礼拝を献げるために立ち、決して罪を除くことのできない同じいけにえを、繰り返して献げます。

- ⑫しかしキリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて、永遠に神の右の座に着き、
⑬その後は、敵どもが御自分の足台となってしまいうまで、待ち続けておられるのです。
⑭なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なる者とされた人たちを永遠に完全な者となさったからです。
⑮聖霊もまた、私たちに次のように証ししておられます。
⑯「『それらの日の後、わたしが彼らと結ぶ契約はこれである』と、主は言われる。
『わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いにそれを書きつけよう。
⑰もはや彼らの罪と不法を思い出しはしない。』」
⑱罪と不法の赦しがある以上、罪を贖うための供え物は、もはや必要ではありません。

第10章前半、①節から⑱節は、「大祭司キリスト論」のまとめの部分に当たります。そういう意味では「この箇所がヘブライ人への手紙の一番中心的なところである」と言うことができると思います。

これまで、皆様とご一緒に考えて来たことですが、旧約の時代に奉げられていた礼拝、あるいは祭儀について、私たち日本人の多くはあまり心を向けませんし、そういうことに対して特に関心を持ちませんから、ヘブライ人への手紙を読むと「何となくわかりにくいな」という感覚をもたれることでしょう。

第①節、

いったい、律法には、やがて来る良いことの影があるばかりで、そのものの実体はありません。従って、律法は年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人たちを完全な者にすることはできません。

特に「犠牲に関すること」は、今日の学びのところでも沢山出て来ます。その「犠牲」というものを、私たちは非常に漠然と神の前に献げる供物、というような格好で考えがちですが、丁寧に聖書を読んでいきますと、レビ記においても出エジプト記においても申命記においても実に様々な形で神の前に犠牲を献げる習慣があったわけで、これらは大変大事な宗教儀式でありました。

そのような祭儀は、イエス・キリストの十字架の贖いのもとに守ることがゆるさされている今日の礼拝ではほとんど行われておりません。でもよく考慮してみますと、その中には旧約において命じられた「神と人間との関係を回復してゆくために必要な幾つかの手続き」があるのです。

「何ゆえ犠牲が献げられるのか」を考えていきますと、少なくとも旧約聖書が解き明かしている中では、先ずこれは、「神と人間とが一つになるための大事な儀式である」と考えられています。ということは、前提として、「神と人間とは普段一つではない状態にあ

る」。それが「罪」ということなのです。神の御支配を無視した生き方をしているので、神の御前に出る時には、神と一つになるために「犠牲」を献げることが必要となる。つまり、神と人間とが和解をもったの交わりをするためには、この犠牲はなくてはなぬものだと考えられて来たわけです。¹⁸³

実は、今日の私たちが奉げている礼拝の中でも神に憐れみを求める祈り、即ち、「キリエ」という形で神の前に献げる「神様、どうか私たちに憐れんでください、私たちに清めてください」という祈りをもって神と私たちが一つになる場を作ることができるのです。そういうことが教会の礼拝の大事な要素として、色々な形で教会の礼拝プログラムの中に組み込まれていることがあるのです。

神と人間とが一つになるために、犠牲を献げる儀式を通して一致を確認してゆくことは、人間の歴史全体から見ると、ヘブライ民族だけではなく、色々な民族が行なってきました。つまり、宗教というものが求めている重要な部分ではなかろうかと言えるのです。ですから、犠牲を献げることは、ヘブライ民族の独創的発想でもなければ、ヤーウエの神に仕えるためにどうしても守らなければならない独自のプロセスだったというわけでもなく、他の宗教と足並みをそろえてイスラエルの宗教においても、神と民とが一つになる方法として犠牲を献げることが行われていたのです。

ところが、「旧約聖書における犠牲」というのは、神と一つになることだけが問題なのではない。神はそのことを通して、「もっと大きな事柄を求めて来られる」のです。そうした意味で、旧約聖書の中で最初に登場してくる犠牲は、皆さんご存じの「ノア」の時なのです。

箱舟からノアが出て神の御前に膝をかがめた時「あなたは、わたしの前に『犠牲を献げて礼拝しなさい』。あなたがわたしの前に礼拝を奉げる時、わたしはあなたと共にいるという約束として『虹』をあなたに与えよう」と言われ、旧約においては、「神が人間と一緒にいてくださること（インマヌエル）を確認するために」ノアは犠牲を献げたのです。¹⁸⁴

ところが、ノアの箱舟の記録を丁寧に読んでみますと、「この犠牲が献げられるまでに、ノアは日常生活をしている上でのあらゆる基準や規範をかなぐり捨てて犠牲にし、ひたすら、神の御声に従った。山の上で舟を造り、そしてその中に神が命じられたようにすべての生き物をひとつがいつつ入れて『神の時を待った』。言い換えるとノアはこの世的な一切のものを捨てて神の言葉に従った。しかもそれが自分自身の利害得失とは全く無関係に、唯々神がお命じになった通りに色々な生き物を舟に収容した。そして神が定めてくださる時を静かに待ち神が開けてくださった時に箱舟から出た」。

このプロセスは徹頭徹尾、神に主役をお任せして、ノアは、神の演じてくださる舞台で自分自身の役割を静かに果たしていく。彼は神のシナリオの中での脇役に徹した。その結果、神は彼に「犠牲を献げること」をおゆるしになったのです。ですから

このノアの献げた犠牲を考える時に、「必要な前段階(信仰における準備段階)がきちんとあった」ことを見なければなりません。(それ以前のアダムの息子アベルが献げた犠牲の供物とは明らかに意味が違うのです。)

更には、創世記に出てくる犠牲の記録として、「アブラハムがイサクを献げた」という犠牲の出来事があります。¹⁸⁵

アブラハムは神の御言葉に従って生まれ故郷のハランを出て行って、宿るところ全てに祭壇を築いて犠牲を献げていったのですが、究極において彼は、15章に書かれていますように、神から恵まれた独り子イサクを神の御前に献げるために「モリヤの山に連れて行きなさい」との御命令を受け、彼は本当に煩悶、苦闘、苦悩があったことでしょう。けれども結局、神の御言葉に従って我が子イサクを献げるために祭壇を築いた。そしてイサクを屠って神の御前に献げようとした。

こうした聖書の信仰はものすごく強烈だと思うのです。他の宗教でも自分が神の御前に大きな恵みをいただくために子どもを献げることがあります。特に長子を献げることは色々な宗教で行われていました。だからイスラエルの宗教の中にもそれらの流れと一脈通ずるものを組み込みながら、断じて「聖書はそれらとは違うのだ」ということ主張するのです。

どう言ったかと言いますと、「我らの神は人身御供はお喜びにならない。」ということです。イサクを屠って神の御前に献げようとした時、神は「もうそれまでで良い、お前はイサクを殺さなくても良い、その藪に角を掛けている雄羊がいるからそれを献げなさい」と言われ、彼はイサクの代わりに雄羊を献げて礼拝をしました。

言い換えると、神は人身御供のようなことが大事なのではない。あるいは、自分自身がすごい決断をし、大事なものを献げたからそれに神が応えて報いてくださるはずというのではない、旧約における祭儀、特に「犠牲」というものがもっている特色は、究極的には「あなたの心を献げなさいという教え」であり、これに「全き従順」という形で神の言葉に徹頭徹尾従って行こうとしたアブラハムの生き方に対する神の応答として、「あなたの罪が赦されるためには「イサクでなくてもよろしい」と示されたのです。

つまり、「大事なものを献げたから神が恵んでくださった、憐れんでくださったのではないよ」ということが出て来る。「あなたの心が献げられなければ他にどんなに立派なものを献げても意味はないよ」と言われているのです。結局、自分自身が持っているどんな素晴らしいものでも、信仰のゆえに御前に差し出してゆくという生きざま、神への徹底的な従順が一番大事だということを証しする意味で、「犠牲を求めておられること」が書かれているのです。

また、そのような背景を探ってみようとするれば、「ソロモンが献げた犠牲」であるとか、「エズラの記録に出ている犠牲」とかを取り上げることもできるのですが、いず

れの場合でも、大事なものは、どんな立派なものが献げられたかではなく「彼が献げる心がどれ程真剣に神と出会いたいと願ったか、神のお言葉に従うことを喜びとしたか」が、その真価を決定付けたのだ」聖書は語っています。

そうしたことを今回は外側から広い範囲で眺めて見たわけですが、律法はその意味で、真実なるものの模型、模倣、色々な表現がありますが、そういう仮のものがその中に現れているだけであって、本当のものは神御自身がお示しくくださる「神の時」を待たなければ出会うことができません。

だから、一つの雛形として与えてくださった事柄を忠実に守り続けたからと言って、本物に到達するわけではない。それがこの手紙で繰り返し言われて来た論旨なのです。¹⁸⁷

どんなに一生懸命やっても自分たちの間だけで分かっていること、見えていること、聞いていること、伝えられていることは本当のものの「雛形」にしか過ぎない。「本当のものは、神と出会って一つになり、そこで起こる出来事にならなければならない。一つになるために必要なのは、「すべてをかなぐり捨てて心を添えて神の御前に進み出、真に一つになりたいと願うことだ」と言われているのです。

ですから、ここで著者は「どんなに律法を守ったところで、祭儀を行なったところで、それ自身は影があるばかりで、そのものの実態はそこにはありません」とも言っているのです。

更に、「律法は年ごとに絶えず献げられる同じいけにえによって、神に近づく人たちを完全な者にすることはできません」と書いてあります。神の御前に近づこうとする私たちを、完全なものにするためには「完全な犠牲が必要だ、模倣では駄目なのだ」、と言っているのです。

第②節、

もしできたとするなら、礼拝する者たちは一度清められた者として、もはや罪の自覚がなくなるはずですから、いけにえを献げることが中止されたはずではありませんか。

罪があると思うから犠牲を献げるのであって、罪がなくなって綺麗に神の御前に洗い清められたとするならば、もう犠牲は献げないでしょう。

ここで使われている「ひとたび清められた者として」というこの「ひとたび」という言葉ですが、これは繰り返す必要がない全き完全、もう二度と繰り返さないで済む完全無欠の清め、罪からの全き解放がそこで起こっていることを言っているのです。「全く清められる」ということは業においても、言葉においても、思いにおいても「神を喜ぶ者になること」であって、「私は清められた」という自己主張をそこで展開することではない。自分自身の清めを大事にすることではないことに、裏打ちされなければならないのです。（神の出来事においては「私」は常に脇役です。）

しかし、現実に私たちはなかなかそうはならない、だから、繰り返し犠牲を献げることが大事だと考えてしまう。結局、律法の下に行なって来たイスラエルの贖罪的な儀式、それはそれなりに意味があったのでしょうか、ということに帰着せざるをえない。

第③節、

ところが実際は、これらのいけにえによって年ごとに罪の記憶がよみがえって来るのです。

その後はずっと続けて書かれていますが、これも興味深い文章です。

「ひとたび」というのは、もう徹底的な完全な清めのことなのですが、その次に、ここで「これらのいけにえによって年ごとに罪の記憶がよみがえる」という、「記憶」と言う言葉があるのです。

この記憶と言うのは、ただ頭の中で「ああ、罪人だったなと考える」だとか「あの時こういうことをやってしまったと思い返す」とか、「あの律法に対して私は不従順だったと感じる」というようなことではないのです。もう少し別な表現では、「そのことによってもう一度罪に回帰する、それは罪に固執しているからだ。だから記憶としてよみがえるのだ」と言っています。

これは原文で読んでみると、もっと厳しい言葉なのです。つまり、あなたがたが犠牲を献げることによって自分が罪人なのだという現実を見せられていく、清められないで罪に固執している存在だということが明らかになる。あるいは、いつでも罪に立ち返ってしまう弱い存在で、贖われ、赦されてもまた罪に立ち返ってしまう脆く弱い、かつ頑なな存在なのだということが思い返されていくのだ。そして、その思い返す姿に対し、神御自身が深い憐れみで関わってくださり、赦しとか報いをその都度告げられて来られたのです。これが「神殿における礼拝」なのです。

犠牲を献げることにより神からの御言葉をいただき、それを祭司が人々に告げる。そして神はその都度冒した罪に赦しを与えたり、報いを与えたり、裁きを下したりなさってこられたのです。しかし神がそのようになさっても、それを受け止めている私たちの方は罪から離れていない、尚も罪を引きずっている。だから、時を定めて何度も神殿で犠牲を献げることが必要になっているのだと言うのです。大祭司が年に一回神の前に大きな祈りを奉げ、贖罪日を設けているのも正にそのためなのです。¹⁹⁰

第④節、

雄牛や雄羊の血は、罪を取り除くことができないからです。

結局私たちの前に示されている神の大きな恵み、深い愛はこんな家畜の犠牲の血によって代行されるような贖いとは本質的に違っているのです。

しかし、神がそのように憐れんでくださっていることを理解できないので、その雛形としてこういう方法を取るしかないのです。

旧約の儀式とか祭儀というものに対して関心を持たらさないと、これほど何でしつこく、くどくど著者が言っているのか全然わからないでしょう。そして、それを、旧約の人々は どう考えていたかという、「この犠牲を献げることが許されているからこそ選ばれた民なのだ」と誇っていました。

この神殿でこの儀式ができるのが「選民の証し」だと言うのです。ですから彼らはそのことによって、「私たちはこの世のものから清められている」のだという意識を持つ。このことが、自分たちの罪を神の前に告白しないでいられる姿勢をとらせるのです」という言い方をしているわけです。この部分は幾分理解しにくい箇所ですね。

「贖われたと自分では信じているその事柄が、実は罪に罪を重ねている結果でしかないのだ。だから、犠牲を献げ続けることは無駄だからもう止めなさい」と預言者は言っているのです。もうあなたがたの祭儀は止めなさい、琴の音も笛の音もかき鳴らすことは止めなさい。讚美もしなくていい、そんなことをすることが返って自分自身を罪人にし、神から遠ざけていくのだから。著者は、そのことを何度も言うのですが、結局彼らは目に見える一つの行動によって「私たちはもう神の前に罪のない者なのだ」と勝手に考えている。

「罪がないのならなぜ犠牲祭儀をなすのか、罪があるからそれを繰り返すのでしょうか」というのが著者の論理なのです。「罪赦された」ということと、「罪人である」ということとの間にどういつながりを持たせて理解しているのか、ということとは当然ここで問題になります。

私たちが「罪赦された罪人であること」は紛れもない事実です。

しかし、この世に在って生き続ける限り、罪びとであるという領域から一步も外に踏み出せない、それ程強い悪の力が私たちを捕まえています。「しかし神は、そのような私たちが罪人でありながら罪のない者であると認定してくださっている。そう認定された者は、その認定された事柄に喜びを感じ、認定された状態に自らを高めよう、近づけようとすることが常識である」という論理がここにある。

神の御言葉によって生きることが喜び、神の御心に従って歩むことを願い求めない限り、進歩もなければ前進もない。救われたと言葉で言い、頭の中では感じていても、自分自身が神の御前に清められているわけではない。これはすごく大事な事柄だと思うのです。その意味で「旧約聖書の中でも犠牲を献げることが、神に徹底的に従順に従う心の動きから発生しなければならない」ということを繰り返し、例えばノアの出来事、アブラハムの出来事、ソロモンの神殿での祈りなどを通して徹底して教えているわけです。

旧約の時代の人々も、その言葉を読んだ、そしてそこから語りかけられる言葉を聞いていたわけですが、どうもそのようには聴かなかった。どう聞いたかという「私たちは選民だからヤーウェの神に犠牲を献げられる、神の御前に優れた存在であるから、他の人よりも祝福を受ける資格がある」という受け止め方しかできなかった。

この手紙の中で「あなたがたの中にもそうした濁ったもの、誇らしいものがあるでしょう」ということが言いたいのです。

第⑤節から⑦節、

それで、キリストは世に来られたときに、次のように言われたのです。

「あなたは、いけにえや献げものを望まず、
むしろ、わたしのために
体を備えてくださいました。
あなたは、焼き尽くす献げ物や、
罪を贖うためのいけにえを好まれませんでした。
そこで、わたしは言いました。
『ご覧ください。わたしは来ました。
聖書の巻物にわたしについて書いてあるとおり、
神よ、御心を行うために。』」

イエスの御言葉として、マタイによる福音書の中にあることを書き抜いているのですが、イエスは神の御意思を行なうためにここに生きておられるのです。「今、生きているのは神のみこころを実行するためです」とイエスは言うておられます。神がお喜びになるのは形だけの犠牲ではなく、私たちの全生活が神の御言葉の実践のために献げられることなのです。

これを今流の言葉でいえば「献身」です。本当の献げ物は献身なのだ、それは肉体を火で炙ることもなければ、引き裂いて血を流すこともない。「自分自身と自分をとりまくもののすべてが神から与えられた恵みであることを知り、それによって初めて自分が存在しているという事実を確認する。神に生かされ、神がそのように与えてくださり、恵んでくださっているという御意思に沿って自分が歩む。それが本当の献げ物なのだ。」と告げているのです。

第⑧節

ここで、まず、「あなたはいけにえ、献げ物、焼き尽くす献げ物、罪を贖うためのいけにえ、つまり律法に従って献げられるものを望みもせず、好まれもしなかった」と言われ、

このように書いてありますが、これは律法の否定ではありません。いにしえの言葉で言えば、燔祭、罪祭、素祭、^{けん祭}愆祭、任職祭、酬恩祭について言っているのです。これらの祭において、旧約で規定されている色々な犠牲を献げる、そういう形を神が望んでいるのでもなければ、好んでいらっしゃるわけでもありません。

第⑨節、

次いで、「ご覧ください。わたしは来ました。御心を行なうために」と言われています。第二のものを立てるために、最初のものを廃止されるのです。

神の御前に犠牲を献げるのは、私たちが神の御心を行なうことができなかつた謝罪です。しかし、神は謝罪することを求めておられるのではなく、「そのことがわかったならば、御心に従って生きなさい」と言われる。嘆くのではなく、「感謝と喜びをもって立ち上がりなさい」と言われる。けれども、姑息な人間にとっては「済みません」と頭を下げて犠牲を献げる方が楽なのです。

神の御言葉によって生きるとはすごく大変なことです。できることなら自分は安穩に自分の領域を確保しながら、神との関係を一応保っていった方がよいと考える。旧約の律法の中で、神が求めておられた、「ここを献げなさい」と言われたことが、いつしか、そういう形にずり落ちて形骸化してしまった。だからイエスは「御心を行うために、生きるために来た」と言われた。⑨節の前半に続くこの言葉、これはすごい言葉だと思うのです。「第二のものを立てるために、最初のものを廃止されるのです」とは！

第⑩節、

この御心に基づいて、ただ一度イエス・キリストの聖なる体が献げられたことにより、それを信ずる私たちも聖なる者とされたのです。

私たちの清さとは、私の一切の罪をイエス・キリストが身代わりに担ってくださって、十字架の上ですべて粛清し免罪してくださったことによるものです。

「神の御前に本当のお交わりをするため血の清めが必要ならば、山羊とか羊とかの血によるのではなく、神の独り子イエス・キリストの御血によって初めて全き清めを受けたのです。旧約の律法はそこにおいて成就したのです」と言っているのです。¹⁹⁵

それゆえ、もはや二度と犠牲を献げる必要はなくなったのです。そういう状況を「わたしが来たのは」というヨハネによる福音書の言葉で語るのです。「わたしがこの世に来た理由は、裁きを行うことや審判をすることのためではなく、わたしをお遣わしになった方の御心を行うためです。自分の意思を実行するためではなく、この世にお送りくださった御方のご意思を生きるためです。」と。

正にキリスト・イエスの「神の前における徹底的な従順」それが最高の献げ物なのです。アブラハムが「モリヤの山にイサクを連れて登ってゆくあのプロセス」こそが最高の献げ物だったわけですが、イエスは、「人類のすべての救いのために御自分が従順になられること」によって神への人々の従順を取り戻すことができました。それを踏まえて、イエスは、ペテロに対してもマタイに対しても「わたしについてきなさい」と言われたのです。

「このイエスについて行くなれば、否応なしに、神への従順がその人の歩みになる」そういう教えが「新約聖書の教え」なのです。ですから、「犠牲を献げなさい」とは言わないで「わたしについて来なさい」と言われるのです。

多くの教会がこの世の人々への伝道のために掲げた御言葉に「誰でも重荷を負うて苦勞し

ている者はわたしの許に来なさい、休ませてあげよう」というのがあります。そこで読みが終わってしまうと、それではイエスさまの所に行って昼寝でもしようかということになる。ところが続けて「わたしが与える軛は軽いからである、わたしと一緒に軛を負って進みなさい」とおっしゃる。

つまり、イエスが神の御前に従順であったように、「あなたも従順でありなさい、それはそんなに大変なことではない、それが本当に幸いを獲得してゆく道なのだから、もう迷わないでわたしの後について来なさい」と言われる、それが喜びの福音なのです。そのことによって清められる、整えられる、養われるのです。

イエスは戦いの道をお選びにならなかった、従順と奉仕の道をお選びになった。権威を人の前にひけらかして生きられるのではなく、神が求めていらっしゃるようにすべての人に仕えられること、そのことのために主の御生涯は費やされ、最後まで用い尽くされた。ご両親に仕えられ、この世における義務をきちんと果たすように多くの人に教えられた。御自分と出会う人々に仕えられた。イエスは出会われた様々な出来事の中で、神の御言葉に従い貫かれた。極力、神力、才覚を現したりはされなかった。当時の曲がった社会制度の中でも力による革命を起こそうとはお考えにならなかった。

旧約聖書の諸規定に対して反対したり、要らないとも言われなかった。その完成を目指して自分自身の歩みを常に整え進められた。特に地上の権威者やすべての者に対して、神が求められるように順応された。神に遣わされた御子として、地上のすべてを見聞なさっていった。

「そして、神の御心のすべてを受容して生きて行かれた。その最高の頂点が、あのカルバリの十字架なのです。

フィリピの信徒への手紙ではそのことを「死に至るまで、しかも十字架の死に至るまで従順であられた」という書き方をしています。ですから「犠牲を献げる生き方（献身）は、新約の教えの中では、神への従順を生きる人生として私たちに求められています」

第⑩節から⑬節、

⑩すべての祭司は、毎日礼拝を献げるために立ち、

決して罪を除くことのできない同じいけにえを繰り返して献げます。

⑫しかしキリストは、罪のために唯一のいけにえを献げて永遠に神の右の座に着き、

⑬その後は、敵どもが御自分の足台となってしまうまで、待ち続けておられるのです。

このところは⑩節までに書かれていることとは言葉の調子が変わっていて面白いと思いますが、特に二つの言葉を際立たせて書いています。

祭司たちは、役にも立たない犠牲を献げるために「立ち」と書いています。

ところが、イエスは神の前に御自分のすべてをお献げになって「座に着き」と書いていません。

つまり、「立っている祭司と、座っている大祭司イエス」そういう一つのコントラストがここでは描き出されています。¹⁹⁹

「立ちつづける」とは、権威的存在として、指導者として、自らを位置づけることを意味しています。「座っている」というのは、子どもが悪いことをして親が叱ろうとする時、「そこに座りなさい」と言い、そうして上から目線で言いたいことを言うのです。

「立っているとは権威的」で、「座っている者は仕える状態」、弱い者の姿ですが、「イエスは完全な救いをなされた権威者なのに座っていらっしゃる」と告げるのです。

また、イエスはガリラヤ湖に漕ぎ出した舟の中でも「お座りになって」群衆にお話しになった。あるいは、姦淫の女が連れて来られた時に「座って」地面に文字を書いていらっしゃった。

イエスが重大なことをなさろうとする時、決まって「座って」なさろうとされるわけです。

癒しを必要とする者の前にイエスは「膝をかがめて」、その目に泥を塗り、手をとって立たせ慰めの言葉をかける。死んだヤイロの娘に対してもイエスは「跪いて祈り」、その手を取って立ち上がらせる。イエスはいつも仕える者として歩むことを示され、イエスはそこで「座って」すべての者に近づき、力のない者、弱い者、しいたげられた者の側に身を置かれることによって赦しと癒しが完成してゆく。「権威によるのではなく、力によるのではなく、愛によって満たされて行くのだ」ということを著者は告げようとしているのです。

とかく私たちは立ち上がることを大事に考える。上から物を言うことに意味があると考え。権威的であることに価値があると思ってしまう。

しかし、聖書はそうは言わない。「本当に必要な願いは、仕える者となって初めて与えることができるのだ。神と一つになるためには、本当に仕えること、従順になることが何よりも大事なのだ。」と告げる

「大祭司であるイエスは権威をもってことをお進めになるのではなく、愛をもってお進めになる。御自分の立場を承認させるのではなく、相手の立場を理解し立たしめるために、御自分が遜って仕えられることによって、神に近づかせてくださる」。そのようなことがこの言葉の中に示されているのではないのでしょうか。

ゲッセマネでイエスが血のような汗を滴らせて祈られた時、弟子たちに「ここに座っていなさい」と言われた。ところが弟子たちは座って待てないで、眠ってしまった。それに対してイエスは腹を立てられず、受け入れられて「彼らは疲れているのだから」と彼らの目覚めを待ち続けられた。でも終わりの時が近づいたのに眠っていたので「さあ目を覚ましなさい、もういいだろう、時が来た、立ち上がりなさい」と告げられ、起こされたです。

「私たちは座るべき時には怠惰になって寝てしまうことが多いのです。でもイエスはひとり目を覚まして祈り続けられる、それが座ることの中でなされる心の戦いであることを、このゲッセマネの出来事は教えています」

膝をかがめ、仕える者としてお過ごしになったイエスの御姿、それをしっかりと聖書のお言葉から聴けるのはヨハネの黙示録にある「わたしは戸の外に立って叩いている、誰でもその声を聞いて開けるなら、わたしはその中に入って彼と共に食事をする云々」という御言葉です。「わたしはあなたを救いたくてたまらないのだ。でもあなたを力づくで救おうとは思わない。あなたが扉を開くならば、すぐにでもあなたを救うことができるのだが」と。あの言葉は大事な御言葉です。

第⑭節、

なぜなら、キリストは唯一の献げ物によって、聖なるものとされた人たちを永遠に完全な者となさったからです。

イエスの贖いは、私たちが永遠に完全なものとしてくださる。罪が赦されて救われる。もはや罪を犯すことができないまでに神の愛によって覆いつくされる。「救われた」というのは本来そういうことなのです、全くの変化を遂げて、神といつでも出会える状態、御意思の中に生きることができる状態が「救われた」ということなのです。イエスの贖いによって、もはや何の躊躇もなく、いつでも自由に神に見える状態に導き入れられるのです。

しかし、残念ながら私たちは既にそのように贖っていただいているにもかかわらず、現実はまだそうではないことが沢山ある。今尚不完全な状態で留まっている。「これでいいのだろうか」ということが出て来る。それ故に、終わりの時に向けて、キリストから与えられた「永遠に完全な者である自分」に変えられるよう、聖霊に導かれ養われ続けていくことを切に求めながら信仰に生きてゆく。

それが「救いに向けて生きて行く」という考え方ではないでしょうか。

第⑮節から⑰節

聖霊もまた、私たちに次のように証ししておられます。「それらの日の後、わたしが彼らと結ぶ契約はこれである」と主は言われる。『「わたしは律法を彼らの心に置き、彼らの思いにそれを書きつけよう、もはや彼らの罪と不法を思い出しはしない。」

神がそう言ってくださる、これは「エレミヤの言葉」（エレミヤ書31章⑳節）です。私はここを読みながら面白いと思ったのは、著者が極めて律法的な事柄を前面に出しながら、贖罪の問題、罪の贖いの問題、神を礼拝する問題を論じて来ているのですが、その一番最後にそのトナーとは全く流れを異にした、「新しい律法の概念、契約の概念であるエレミヤの言葉を持ってきて締めくくっている」ことです。

言い換えると、神の掟は正にエレミヤによって告げられたように、深い憐れみによって

与えられるものなのだ。このことは契約を与えた神御自身がおっしゃっているのです。

「わたしがこの十戒を与えるのは、わたしがあなたがたをこよなく愛しているからなのだ。それは、あなたがたが優れているからではなく、わたしが愛さなければあなたがたは消え失せ、なくなってしまうからだ」と述べておられるのです。

第⑩節、

罪と不法の赦しがある以上、罪を贖うための供え物は、もはや必要ではありません。

「神の愛に基づく贖い、赦しをもう一度確認する形」でこの手紙の「大祭司キリスト論」は終わるのです。

大祭司なる御方は、罪と義を黒白をつけて裁かれるためではなく、墨のように黒いものもキリストの血潮によって雪のように白くしてくださるために、愛をもって贖いの業を完成してくださった。「あなたがたの中に残っている黒い墨のようなものも、愛の血潮によって洗い清められ、白い衣を着た者として神の国に立つことがゆるされるであろう。その日に向けて完成を願い求めるならば、イエス・キリストの従順を見習いなさい」これが著者の根本的な一つの呼びかけだったのではないかと私は思います。

そのあとの第⑪節からは、いよいよ「勧告」に入ります。

「贖い主なる神とあなたがたとの関係はこうですよ」ということを10章の⑩節までで述べた後で、そういう関わりの中にいるあなたがたは「今こう生きなさい」と極めて具体的なことを述べていくわけです。

その意味ではこの構造はパウロが書いたローマの信徒への手紙とよく似ています。ローマの信徒への手紙の11章まではいわゆる教義的な展開をずっとして来て、第12章になって「あなたがたのからだを神の生きた供え物として献げなさい」と言って、具体的な生きざまを語るのです。そして全く同じようにこの後、ヘブライ人への手紙の著者も具体的な勧告を語り始めるのです。乞うご期待を！(1997年7月12日)

写者あとがき

松山幸生先生はこの口述の「まえがき」で「旧約聖書の学びから新約聖書の学びに進むにあたり、その間の架け橋的な役割を担う文書としてヘブライ人への手紙を選ばれました。また、キリスト教とユダヤ教との関わりについて関心を持たれる方々にもお役に立てると記されています。今回も⑤⑥⑦節は詩編第40編⑦⑧⑨と関わり、⑫⑬節は詩編第110編①と更に⑯⑰節はエレミヤ書31章⑳～㉔と関わっています。同じヘブライ人への手紙5章⑧⑨「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました。そして、完全な者となられたので、御自分に従順であるすべての人々に対して、永遠の救いの源となり、」を受けてキリストが「永遠の救いの源」となられたことを強く述べています。

松山幸生先生の説き明かしは更に広く旧約聖書を引用されて詳細な口述となっています。

今回から原文の「 」を省略したり移動したりして読みやすく工夫いたしました。ご了承お願いいたします。